

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和3年度病虫害発生予報第2号(5月)について

このことについて、病虫害発生予報第2号を発表したので送付します。

予報第2号

小麦病害の発生状況を確認しましょう！

4月5半旬の調査において、コムギうどんこ病の発生ほ場率は42.9%(平年・前年0%)、赤さび病の発生ほ場率は28.6%(平年1.3%、前年7.1%)と多くのほ場で確認されました。どちらも春が温かく、麦の生育が早い年に多発しやすいため、ほ場によっては収量・品質に影響を及ぼすことが懸念されます。

令和3年4月22日に発表された1か月予報によると、気温は平年並か高いと予想されており、これら病害が発生拡大しやすい条件となっています。

そのため、ほ場内での発生状況を把握し、必要に応じて防除を実施するようお願いいたします。

コムギうどんこ病および赤さび病の生態については、県ホームページに掲載している『令和3年度版病虫害・雑草防除の手引き』をご参照ください。

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>



図1 うどんこ病



図2 赤さび病

<予想される向こう1か月の天候(令和3年4月24日~令和3年5月23日)>

寒気の影響を受ける時期もありますが、暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は、平年並か高いでしょう。

高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、向こう1か月の日照時間は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

（福岡管区気象台 令和3年4月22日発表抜粋）

5月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	5月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	並 少	並 やや少	並 並
なし	黒星病 赤星病	多 少	やや多 少	やや多 並
かき	フジコナカイガラムシ	並	並	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	—	少* (前年比)	
茶	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	やや多 少 やや多 やや多	やや多 やや少 やや多 やや多	並 並 やや多 やや多

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

*果樹共通・チャバネアオカメムシの予報は前年比としている

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 0.2%（平年 0.2%、前年 0.3%）

発生ほ場率 9.1%（平年 15.1%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

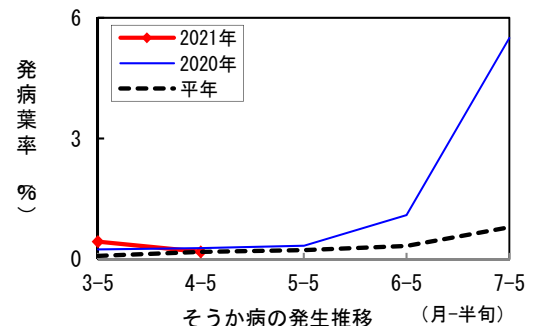
(3) 防除上注意すべき事項

ア 発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。

イ 罹病葉・枝は伝染源になるので除去する。

薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避ける。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p7の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発生葉率 0.9%（平年 3.3%、前年 0.7%）

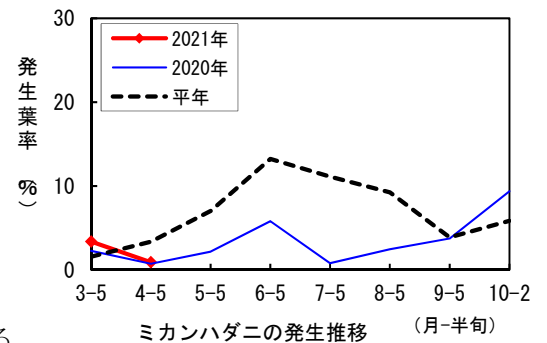
発生ほ場率 9.1%（平年 34.9%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避ける。

イ 農薬の散布にあたっては、散布ムラがないよう葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

発病花叢率 3.6%（平年 0.5%、前年 0.3%）

発病花叢ほ場率 50.0%（平年 33.9%、前年 30.0%）

発病葉率 0.8%（平年 0.0%、前年 0.1%）

発病葉ほ場率 20.0%（平年 7.4%、前年 20.0%）

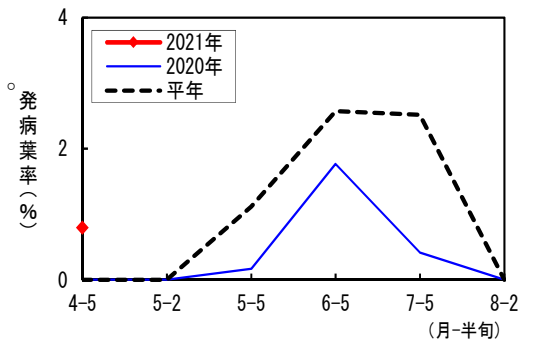
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤防除にDMI剤やQoI剤、AP剤、SDHI剤を用いる場合は、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、異なる系統の薬剤をローテーション散布し、同一系統剤の使用回数は春季防除で年1回、年間でも2回以内にとどめる。また、これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。



2 赤星病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

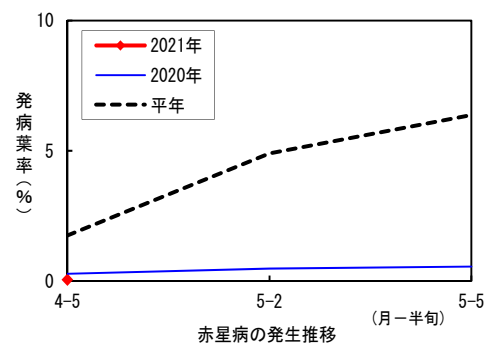
(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病葉率 0.0%（平年 1.8%、前年 0.3%）

発生ほ場率 20.0%（平年 37.3%、前年 63.6%）

イ 4月5半旬の県下3地点のナシ園周辺のビャクシンにおける、小生子の飛散ピーク（ナシ赤星病菌冬孢子堆の成熟度60程度の時期）は前年より早く、4月1半旬頃と考えられ、4月5半旬には飛散はほぼ終了している（－）。



ビャクシン上のナシ赤星病菌冬孢子堆の成熟状況の推移(水浸法)

調査地点	調査時期 月-旬	2018年		2019年		2020年		2021年	
		膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度
朝倉市	3-5	7	2	30	8	78	27	46	23
	4-2	100	80	91	53	69	27	100	72
	4-5	-	-	-	-	100	80	100	75
八女市	3-5	19	5	14	4	74	30	78	39
	4-2	100	84	88	61	97	50	100	69
	4-5	-	-	-	-	100	79	100	80
筑紫野市	3-5	14	4	42	11	57	24	80	49
	4-2	-	-	100	70	93	53	100	92
	4-5	-	-	-	-	100	87	100	90
平均	3-5	13	4	29	8	70	27	68	37
	4-2	100	82	93	62	86	43	100	78
	4-5	-	-	-	-	100	82	100	82

注1) ビャクシン上の冬孢子堆を水に30分浸漬し、膨潤程度を、A:冬孢子堆が外観的に完全に膨潤、B:一部が未膨潤、C:約50%未膨潤、D:一部膨潤、E:全く膨潤していないの5段階で評価後、膨潤率と成熟度を下記の式により算出

注2) 膨潤率=(A+B+C+D)/孢子堆数×100

注3) 成熟度={ (4A+3B+2C+1D)/(4×孢子堆数) } ×100

注4) -は欠測

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(―±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にDMI剤やSDHI剤を用いる場合は、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、異なる系統の薬剤をローテーション散布し、同一系統剤の使用回数は春季防除で年1回、年間でも2回以内にとどめる。

【果樹：かき】

1 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

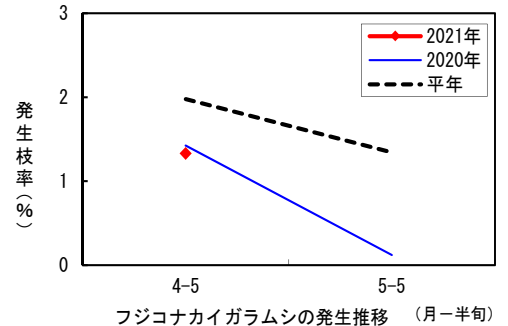
(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生枝率 1.3% (平年 2.0%、前年 1.4%)

発生ほ場率 36.4% (平年 44.3%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 農薬の散布にあたっては、散布ムラがないように十分な薬量で薬液がまんべんなくかかるよう丁寧に散布する。

<詳細は、県ホームページ掲載の「令和3年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「防除方法の試験研究成果等」-「果樹」-「X フジコナカイガラムシの発生生態と防除対策」を参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/553564_60518165_misc.pdf

【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年より少

(2) 予報の根拠

ア 県下29地点の常緑広葉樹林下落葉中における1㎡当たりの越冬成虫数は0.3頭/㎡で、前年(5.0頭/㎡)より少なく、過去10年で最も少なかった2011年(0.6頭/㎡)より少なかった(表)(-)。

また、越冬成虫の採集地点率は41.4%で、前年(97.0%)より低く、過去10年で最も低かつ

た2016年(67.6%)より低かった(一)。

表 チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬成虫数、採集地点率及び4～7月成虫誘殺数

項目/年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2011～20年平均	
越冬成虫数(頭)	県内平均	0.6	3.2	0.7	4.8	0.9	0.8	0.9	3.8	0.8	5.0	0.3	2.0
	久留米・朝倉	0.6	4.7	1.0	7.8	1.2	1.4	1.3	4.7	1.0	6.8	0.4	2.8
	筑後	0.7	2.3	0.9	2.6	0.8	0.6	0.4	2.1	0.6	3.2	0.03	1.3
	福岡・飯塚・行橋	0.4	2.1	0.1	2.8	0.5	0.2	0.9	4.3	0.8	4.3	0.3	1.5
県内採集地点率(%)	82.4	94.1	73.5	97.1	76.5	67.6	79.4	97.1	79.4	97.0	41.4	80.5	
4～7月成虫誘殺数(頭)	予察灯	339	2,501	112	2,128	86	126	206	1,400	120	2,951	-	997
	フェロモントラップ	1,312	11,957	553	15,279	237	338	493	2,530	38	2,635	-	3,537

イ 4月1半旬～4月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年並～やや多かった(±～+)。

誘殺数 <筑紫野市> 8頭(前年0頭、2019年0頭、2016年4頭)
 <宗像市> 0頭(前年0頭、2019年0頭、2016年2頭)
 <うきは市> 56頭(前年1頭、2019年0頭、2016年19頭)
 <八女市> 0頭(前年0頭、2019年0頭、2016年10頭)

ウ 4月1半旬～4月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年並であった(±)。

誘殺数 <筑紫野市> 0頭(前年0頭、2019年0頭、2016年0頭)
 <久留米市> 1頭(前年0頭、2019年0頭、2016年0頭)
 <うきは市> 0頭(前年1頭、2019年0頭、2016年0頭)
 <八女市> 0頭(前年0頭、2019年0頭、2016年0頭)
 <飯塚市> 0頭(前年0頭、2019年0頭、2016年0頭)

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャバネアオカメムシは夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。
 なお、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。

イ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。

【茶】

1 カンザワハダニ

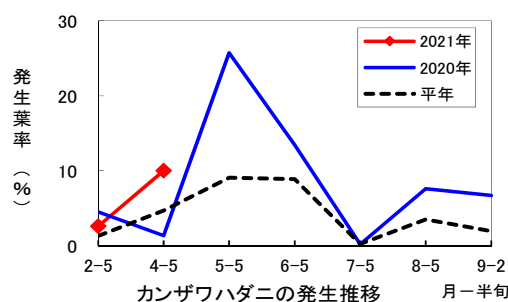
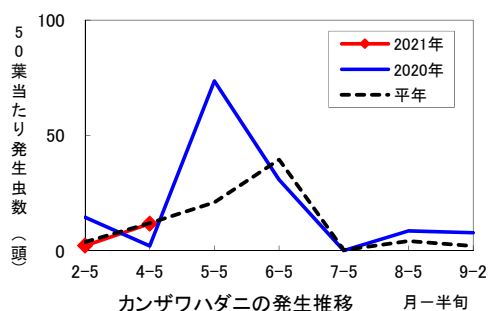
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

50葉当たり虫数 11.8頭(平年11.9頭、前年2.2頭)
 発生葉率 10.0%(平年4.7%、前年1.3%)
 発生ほ場率 75.0%(平年40.9%、前年50.0%)



イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。

イ 農薬の散布にあたっては、裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 7の内容を確認の上、適切に実施する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった

(一)。

たたき落とし虫数 0頭（平年 0.6頭、前年 0.2頭）

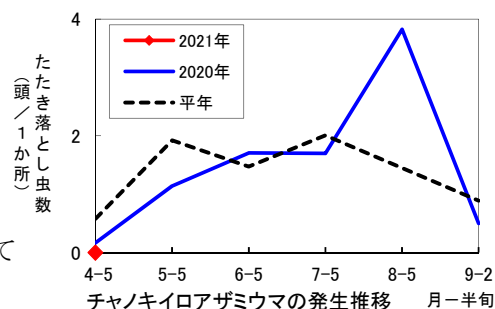
発生ほ場率 0%（平年 31.0%、前年 16.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に注意し、B 5判板上の5回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 二番茶の萌芽期から開葉期を重点に防除する。



3 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多

(±～+)。

たたき落とし虫数 1.1頭（平年 0.0頭、前年 0.0頭）

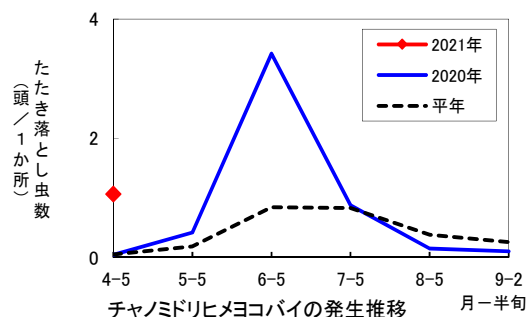
発生ほ場率 75.0%（平年 13.3%、前年 16.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況に注意し、B 5判板上の5回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。

イ 一番茶摘採後、又は二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



4 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった

(±～+)。

発生葉率 11.5%（平年 6.5%、前年 8.3%）

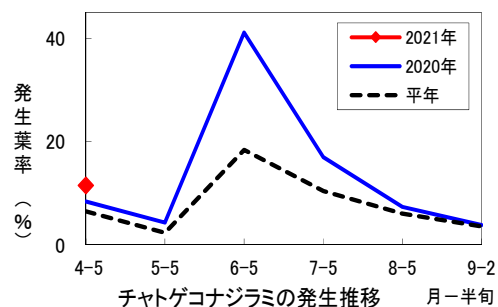
発生ほ場率 75.0%（平年 62.8%、前年 83.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期である第一世代幼虫の若齢幼虫発生期は、平坦地では5月中旬頃、山間地では5月下旬頃であるが、本年は成虫の発生時期が平年より早いため、若齢幼虫の発生状況には十分注意する。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に薬液が十分にかかるように



丁寧に散布する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壤にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

福岡県病害虫防除所ウェブサイト（右QRコード①）



Twitter（ツイッター）を始めました。

Twitterの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL：https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②

